

# 商工經濟研究

第八卷 第一號

(昭和八年  
二月十五日發行)

## 日本の國家と經濟 (一)

作 田 莊 一

本稿は昭和七年十二月二十二日、京都帝國大學教授經濟學博士作田莊一先生が特に本校生徒のために爲されたる講演を速記したるものにして、同博士の校閲を経たるものである。

私は日本の國家と經濟といふ題目に於て、日本の國家生活と經濟生活の關係に就きまして、特に外の國と異なる處の我國の情勢、特質に就て話したいと思ふのであります。

今日の時代は非常時の時代といはれて居ります。如何にも種々の方面を見ましても、是迄經驗しない處の餘程變つた情勢になつて居るのであります。例へば政治の方面でありましても、政友會が三百人の代議士を持つて居りますが、それで内閣の組織が出来ないのであります。先には一國の總理大臣が白晝暗殺され、否寧ろ明殺されて居るのであります。而も一般の人はさまざま驚かない。驚くべき事件に對して驚かないといふことは其處に非常

な時代を暗示して居るのであります。又、國際情勢に於ては御承知の如く、今歐米諸國は凡て自分自身の深い悩みを持つて居りますから、どの國も滿洲問題に對して思ひ切つた態度を執り得ないのであります。言ひ換えれば大國の凡てが竦んで居るから、それで幸にもゼネウバに於て松岡全權をしてあれだけの大氣焰を擧げしめ得るのであります。あれは日本が強いのか歐米の巨大國が竦んで居るのか、恐らく兩方であるのでせう。然し我國が餘りに進み過ぎますと、所謂過ぎたるは及ばざるが如き處迄ゆきますと、世界戰爭に導く危険が多分にあるのであります。世界戰爭に引入れられた時の場合は、それは實に憂うべきものであらうと思ふのであります。どうしても世界戰爭に引入れるといふことは出來得るだけ避けなければならぬのであります、經濟界の方は申す迄もなく今は輸出が盛んに行はれて居りますが、もう少しして今迄の原料が無くなると同時に、ストックも無くなりますと、輸出の好條件もなくなる時が極く近い内に來るであらうが、其の時は又實に甚しいショックを受けるであらうといふことは想像に難くないのであります。又、財政上インフレーションが頻りに行はれて來ますれば、それだけの變化が起るか、無論それは決して樂觀される状態ではないのであります。

一體日本の今日ある所以は、明治以後に於て日本の國民經濟が特殊の性質を持つて居るといふことから説明が出來得るのであります。殊に經濟國難と呼ばれるものは、私は昭和二年頃からであると思ふのであります。世界戰爭終つて大正九年に一度恐慌が起りました。其の後ずつと不況續きで來まして、何時か直るであらうといふ豫期を裏切つて、經濟學で教へるやうな景氣循環の法則は伴うて出て來なかつたのであります。遂に昭和二年に

金融恐慌に到達しました。此の恐慌に依つて戦前高いコストで經營した事業は大體整理される。又金融の機關も其處で整理され、健全なものだけが後に残つて立直しが出来るといふ情勢になつたのであります。恐慌とは御承知の如く、是は資本主義に附物でありまして是で整理されると資本主義は又健全に立直るのが普通であります。丁度チブスに罹つたやうなものでありまして、チブスに罹つた後は却つて健全まかになる如く、恐慌は寧ろ資本主義制そのものにとつては歓迎される現象であります。恐慌の中で瘡れる資本家は氣の毒であるが、資本主義全般としてはよくなる處の一つの方法であります。其處で恐慌が屢々來ればそれだけ資本主義は整理されつゝ更に次の生活を續けてゆくといふやうになつて居たのであります。處が昭和二年の金融恐慌はそういう例をとらないのであります。是で直ると思はれたのが逆になつて益々不況に沈淪して來たのであります。そして昭和三年の最初に行はれた處の普通選挙は、是又國民の期待を裏切つて政治の上には何らの改善も見られない、寧ろ選挙費用が餘計になり買収が殖えたといふ位のものでしかなかつたのであります。そして同じく昭和三年に於ては御承知のやうに共產黨の大選挙が行はれました。そして今迄世間では知られなかつた處の新しい事實、即ち日本にも又三千年來の歴史を覆すやうな、そういう運動が可成り深い處迄根を擴げて居るといふことが、一般の人々に初めて認識されたのであります。其の後に於て昭和四年の秋からのアメリカの恐慌は日本にも大きな影響を與へ、或は金の輸出を許してみたがうまくゆかないので、又禁止したがまだいかない。種々の方法を盡して参りましたけれども、其の方面は所謂光明を認めないのであります。生産の方面でありまして、或は労働者の方面に於ても、失

業の方面、就職の方面等益々不況に向つて進むのであります、其處で今日日本の將來、特に國民經濟の將來はどうなるであらうかといひ、どうしたらいいかといふことを考える餘地はないのであつて、唯どうなるであらうかと心配するやうな有様であります。どうしてそんなつて來たかといふ事情に就て私の考える處を申し上げます。

大體に於て、日本の國民經濟は明治の維新から面目を變えて近代國民經濟となり、近代資本主義を採用し凡て歐米諸國と同じ狀勢に於て進んで來たのであります、大體に於て日露戰爭頃迄は上り坂に於て、漸進的に經濟の進歩を見たのであります、日露戰爭以後は下り坂になりました、それからは次第々々に形勢が悪くなります、そして大正三年に於ては已に不良の情勢が正貨の方面に於て現はれ、正貨の流出に堪えられないでどうしたらいいか、遂には臺灣を賣らうか、滿鐵を賣らうか、是ならアメリカは買つて呉れるだらう。是で一つ財産整理に依つて難關を切り抜けやうといふやうな考え迄出たのであります。大正三年に於て、最早或る程度迄は行き詰つて來たのであります。然るに同じ年の世界大戰に依つて形勢は全く變りました。其の五年間は全く人々をして好景氣に宇頂天にさせたのであります。私はあの五年の間を戰時舞踏の時期といつて居ります。人々は唯ジャズに酔つてダンスをやつて居るやうな時代でありました、儲かる／＼といふ聲に酔つて全然自分を忘れたやうな状態でありましたが、是は決して我國の特有なる經濟力の發展ではなくて偶然の戰爭に依る需要の増加といふに止まつたのでありますから、戦後に於けるその反動は、景氣が非常に不良となつて遂に今日のやうな經濟恐慌に進んで來たのであります。どうして然らば日本の國民經濟がさういふ經路を取るかと申すと、是に就て私は日本の國民

經濟の特色を二つ擧げるのであります。是は外の國民經濟にない特色であります。

第一に我國に於ては、嘗て生産の進歩から輸出超過を見たことがないといふ事實であります。それから今一つは我國に於ては殆ど外國の資本が入つて國の産業を起したといふ事實がないといふことであります。輸出超過が嘗て起らない、外國資本が入つて來ない、此の二つであります。貿易の方から申すと、大體どの國でも最初は輸入超過でありました。それは外國の新しい種々のもので自國に出來ないものを輸入いたします、がそれでは貨幣を無くして了ふ虞れがありますから、其の次には國産を起すために外國から或は機械を買ひ、鐵道材料を買ひ、或は技師を雇ふといふやうに、生産手段を外國から求めるのであります。是は無論輸入超過になりますが、其の國は外國から資本を借り入れて生産手段を輸入するのであります。是に依つて漸次に國産が起ります。一國の産業が發達してゆけば自ら輸入は減じ輸出が増加し進んで輸出超過となるのである。が最初の時代の輸出超過の間は外國から借りた資本の利子を支拂ふ。是で對外收支の均衡を取つてゆく。だから輸入超過の後は輸出超過が來るのであります。輸出超過を長らく續けると今度はそれだけの差額として得られた處の貨幣は、今迄外國から借りた資本を償還する。更に進んで輸出超過が續き尙有り餘る處のものは、國內に投資するには利廻りが少なくなつて來ますから、後進國に貸し付けるといふことになる。そうしてそれから利子を得るやうになれば貿易は必ず輸入超過に變つて來るのであります。其處で現在の英吉利、佛蘭西、大戰前の獨逸の如き國は已に第三段の輸入超過に達入つて居ります。輸入超過が通例になつて來て居る戰前の露西亞或はアメリカの如きは輸出超過國であ

つた。アメリカは英吉利から借つた資本の利子を支拂ひ、露西亞は佛蘭西から借つた資本の利子を支拂ふ。故に輸出超過を續けてゆくのであります。南米諸國も又歐羅巴諸國から借つた資本に對して利子を拂ひ輸出超過をやるといふやうに、段々と後から出て来る國民經濟を、輸入超過、輸出超過、輸入超過と、此の三段の變化をするのであります。是は何處の國の國民經濟を調べましても、皆そなたて居るのである。又それに依つてどの國はどの階段に居るといふことを指摘され得るのであります。處がどうしても輸入超過をやめ得ないで輸出超過にならない國は先づ支那と日本だけであります。支那も開國以來嘗て輸出超過をやらない。是は支那の産業がまだ近代的な處迄來て居らないのである。開港地には近代産業が外國資本に依つて起り、又内國資本もそれに眞似て少しはありますが、國民經濟全般としては支那はまだ工業に於ても極めて幼稚であります。農業も又非常に貧弱な状態にあります。然し今後支那の政府が確立して近代産業に這入つてゆくならば、支那は必ずや輸出超過をなすであらうといふことは、種々の事情から考えられるのであります。處が日本は支那と違つて工業に於ては已に歐米の一流國と同じ水準に迄來て居るのであります。是から國産が起つたならばといふのは支那のことであつて、日本に於きましては已に起り得べき産業は殆んど皆起つて居るのであります。工業の方面からいつたならば日本は最早一流であります。斯やうな國であり乍ら然も輸出超過にならないといふことは、是は日本だけに見る現象であります。全く特色であります。尤も明治十七年頃から明治三十年の間に於て輸出超過は數回ありましたが、是は國內産業の進歩から來たのではなくて爲替關係から輸出超過を來たしたものである。即ち此の期間に於ては

日本は事實上は純然たる銀本位國になつて居ります。然るに銀の價格は次第々々に下落して居りまして、御承知の如く、明治初年に於ける金銀比價は一對十六であつたものが、明治三十年に一對三十二になつて二分の一に下落して居ります。左様に銀は漸次下落して來た。従つて銀貨も又對外爲替に於てそれだけ下落して來ます。此の圓が下がるといふことはそれだけ輸入に對しては關稅が多くかゝると同じ結果となり、輸出するに於てはそれだけ安く出し得るやうになります。爲替が漸次に下落して行く時、輸入品は漸次高く輸出品は漸次安くなつてゆく。斯ういふ極めて好都合な條件の下に、數回輸出超過はあつたのであります。それは決して産業の進歩には依らないで、爲替關係から來たといふ證據は明治三十年に金本位となつて、それ以後は漸次輸出超過はバタリと行はれないやうになつて、ずつと輸入超過であります。又世界戰爭に於て特殊な事情から、大きな輸出超過はあつたけれども是も其の事情が止んだならば、直ちに戰後に於ては大々的な輸入超過で今日迄それが續いて來て居るのであります。であるから外の國が經過したやうな経路は決して取らないで、日本は先天的輸入超過國といはれて居るのである。貿易上から觀た國民經濟の發達を、外國經濟に比較すれば、日本は其の第一學年がどうしても進級出來ないので。國を開いて己に七十九年、約八十年であります。其の間に於てあらゆる方面に發展進歩を遂げまして、産業の上からいへば、第一流の國になつて居り乍ら貿易の方面からいへば、第一學年がどうしても進級出來ないので、是は或る意味に於て日本の國民經濟は低能兒であるといはなければならぬ。大なる努力はして居るけれども第二學年に及第出來ない。斯ういふ風なのは日本の一つの特徴であります。

それから今一つは外國資本が這入らないといふことであります。外の國を見ますると、例へば、アメリカは英吉利の資本を入れて産業を起し、露西亞は佛蘭西の資本を入れるといふやうに、或は南米諸國は歐羅巴諸國、或は北米合衆國の資本を入れる。支那といへども、始めは外國の資本を入れて種々の産業を起し、鐵道を敷き鑛山を拓く等、どの國でも最初は必ず外國資本に依つてそして産業を起してゆくのであります。處が日本には産業のために外國資本が殆んど這入つて居りませぬ。日本の外債の大きい時は二十五億圓にも上つて居りますが、其の大部分は日露戰爭當時の軍事費の借金であります。是は戰爭で費つて了ひ、それから其の他に於ての巨額の外債は正貨を補充するための借金であります。貿易は輸入超過であるからどうしても正貨で決済して拂はなければならぬ。其の正貨が涸渇して居れば、兌換制度は倒れますし外國の信用は失ふので、正貨を維持するためには借金より外に方法はなかつたのであります。それで明治三十八年の日露戰爭以後大正三年に至る世界戰爭の年に至る十年間は、一年として外國から金を借らない年はないのであります。毎年々々外國から金を借つてそれは何にするか。殆ど凡て正貨の補充であります。金本位の維持であります。であるから此の金は資本として入つたのでなく丁度、我々が借金をして居て其の方の支拂ひに困るから此方から借つて先方のを支拂ふといふやうにやつて一向それは生産を促進する資本にはなつて居らないのであります。それで産業のために用ひられた外國の資本は先づ日本では電氣事業が一番多いのであります。是は主にアメリカから借つて居ります。アメリカの方では電氣に關する種々の機械を賣込むから、或る意味に於て其の機械を買ひ入れる金としてのアメリカの資本を用ひて居



るのであるが、全體からいえますと、産業のために外國の資本が入つて居る割合は極めて少ない。大部分は軍事費と金本位維持の借金であります。左様に外國から資本を借らない。支那の如きも革命後は殆んど資本は這入らないけれども、是は支那の政府が確立してゐないのであつて元利の償却が不安であるから、支那に資本が來ないのである。アメリカの如きは支那へ資本が出したくて堪らないのであります。常にアメリカから支那に資本が出たいといふ其の勢ひ、其の間に日本が這入つて居ります。それであるからアメリカから支那への資本の移動といふものが動くに對して日本が間に入つて居るといふことが、日米關係を險惡にして居る譯であります。支那の方には資本が入る可能性が多分にあるが、未だ信用が置かれなから資本が這入らない。が日本の如きは評判になつて居る程信用の厚い國民であつて、未だ日本は外國から借つた金に對して元金は無論であります、利子を一錢待つて呉れといふことを一度もいつたことがない。日本人程其の點には信用の厚い國民はないとまでいわれて居ります。國際法でも同様であつて、日本が國際法を忠實に守るといふこと、是が歐羅巴國際法を世界國際法に進めた所の大きな原因であります。以前は國際法は強制力が伴はないから教養の高い國民でなければ、適用出來ない、教養の高いといへば、キリスト教徒でなければならぬのであるから國際法はキリスト教國民の法律だといつて居たのであります。それに對して日本が國際團體に加盟した後、極めて忠實に國際法を守つた。是が歐羅巴國際法を世界國際法に名實共に變へて來た所以であります。今日でも滿洲問題に就て、聯盟規約、不戰條約及九國條約といふ、此の三つの條約があるので非常に苦心慘憺するのである。若し獨逸がベルギーの中立を破つたや

うな態度で必要の前に權利ありといつたら何も心配することはない。今や歐米諸國も弱つて居るのであります。どん／＼やつて了えばいいが、日本の立場としては國際法の遵守といふことは寧ろ神經過敏な程忠實であります。其處で帝國としては國際法は忠實に守りたい。然し今日の狀勢に於ては滿洲問題を解決しなければならぬといふ、此の二つの要求に挟まれて居るといふことが、是が昨年以來の滿洲問題に於ける日本の立場をよく理解し得る所以であります。其處で日本に對しては決して信用の薄いといふことではありません。然るに日本には資本が這入つて來ない。是は何であるか。どうしても其處に物質的な事情がなければならぬのであります。

以上舉げました二つの特色、輸出超過に進級出來ないといふこと、外國資本が這入らないといふこと、先づ日本に於てのみ見られる此の特色は、然らば如何なる原因から來て居るか。私は是を主として富源生産力の貧弱であるといふことに歸するのであります。我が國民經濟が生産手段の中の富源が貧弱であつた。私は生産手段を四つに分けて居りますが、勞働と技術は、是が人的生産手段、それから富源と、資財と、これが物的生産手段であります。資財と云ふは物的生産手段で、營利の元本たるとは違ひます。勞力と技術とが人的生産手段、富源と資財とが物的生産手段、従つて生産力は此の四つの生産手段に具つて居るのであります。そして生産が行はれる場合は此の四つの生産手段、若しくは生産力が結合した時に初めて生産は可能であります。四つの生産手段が別れ／＼では生産全く出來ない。結合した時に於てのみ生産は可能であります。無論生産の種類に依つては結合の割合が違ひますが、兎も角四つが結合する、此の四つのものゝ中、我が國に於て一番缺乏して居るのは富源で

あります。天然に與へられた處の物質的な生産手段であります。此の富源生産力が如何なる働きをするかと申すと、私は此の點に於て富源理論といふものを唱えて居るのであります。それは資本理論を補ふものであります。四つの生産手段が結合して生産をする。其の生産から剩餘が出て来る。此の場合の剩餘は何から來たかといひますと、無論四つの生産手段から來た。四つの中技術といふものは勞働力の中に入り込んで居るのであります。例へば職工でありますと、どんな熟練した職工でもどんな未熟な職工でも、生活資料はそう相違はないのであります。腕のいゝものが特に美味しいものを食ふといふ譯ではない。それから資財である機械、原料などいふものは、是は以前の生産で出來たもので結局は富源と勞力とに還元することが出来る。天然に與へられた處の物質的なもの、それを我々の勞力に依つて引き出して來たもの、是が資財であります。で此の資財といふものは結局は富源と勞力に還元出來ます。富源だけでは出來ないが、富源と勞働で資財が出來て来る。處で富源と勞力とは孰れも一方を他方に還元されることは出來ない。そこで生産は結局富源と勞働力との二つの生産力に還元出來るが、富源と勞働力だけでは各々獨立した生産力であります。富源も人工的に出來たものではなく、全く自然に與へられた物質が生産の方向から見られたものであります。勞働力も又人工的に作られたものではない。我々が人間生活をなすに於て自然に與へられた、自然に持つて居る心身の活動を生産に向けたものが、勞働力であります。富源及び勞働力といふものは夫々獨立した存在を持つて居る。それで生産に依つて剩餘が出來た場合の其の剩餘は富源から來たのと、勞働から來たものと其の二つの剩餘を持つて居る。其に富源剩餘と勞働剩餘といふ言葉を使

ひます。マルクスの理論からいひますと、剩餘は凡て労働からといひますが、私は富源と労働の二つの源泉を持つと思ふ。無論富源といつても、例へば茲に鑛山があります。其の鑛山自身は何も動かないのであります。是に労働を加えて石炭なり鐵を掘り出したら初めて富は出て来る。労働を加へなければ富は出て来ない。其の場合矢張り労働に依つて出来たのではないかといふ人が多いのであります。が私はそう考へない。其の場合労働を加へることに依つて此の富は出て来るけれども、富の由つて來たる處の源泉は労働ではない富源にある。此の意味から無論鑛山から石炭が掘出されたときに労働の働きから來た剩餘もあります。労働だけでは無い。富源から來た剩餘もある。其の例に就てよく引くのは寫眞の例であります。畫撮つた寫眞は太陽の光線で撮る。晩は特別に装置した電燈で撮る。此の場合に於て同じ寫眞が出來て同じ値段で賣れる場合に、其の何れが餘計儲かるか。夜の方は特殊な電燈装置をするだけ生産費が餘計かゝるが、畫撮る方は太陽の光線で撮るから無代であります。其處で茲に二人の寫眞屋があり、一人は晝しか營業が出來ない、一人は夜だけしか營業が出來ないと、斯う定めて居て競争させたら何れが勝つか。同じ値段で賣るのなら晝の方が生産費が少なくて儲けが多い、又それだけ値段を引きまして儲けを同じやうにすると夜の方が高くなつて儲かりにくいに定つて居ります。斯くの如く太陽の光線から寫眞を撮る場合には此の天然自然の富源生産力がある。即ち光線が産物の中に生産力として働いて来る。無論寫眞屋が労働しなければ太陽の光線は寫眞の中には來ませんが、労働を通さなければ剩餘は出來ないけれ共、剩餘が出て來た源は労働でなくて太陽にある。此の意味に於て生産に剩餘をどれだけ出すかは富源に

多く依頼する産業とそうでない産業とは違つて來るのであります。でアメリカがあれだけの富を得ましたのは無論アメリカの企業精神が旺盛であり種々の事情もありませうが、大體に於て富源生産力が働いたといふことが一番大事と思ひます。アメリカの生産品の中輸出超過を續けて居る主なる輸出品を見ますと、例へば小麦でも棉でも木材でも、或は鐵石炭を利用した處の種々の工業品であつても、或は石油であつても殆んど目星しい輸出品は天然の富源生産力を多分に利用した産物であります。其處でアメリカで棉を作りますと、此の棉の生産から得られた剩餘といふものは、労働者から出した労働剩餘とアメリカの土地が與へて呉れた處の富源剩餘との結合であります。日本がアメリカの棉を買ひますと、棉の値段の中に富源剩餘と労働剩餘にあたる部分は含められて居ります。それを日本から代價として拂ふ、アメリカ人は棉を賣ることに依つて労働剩餘は労働所得であります。富源剩餘にあたるものは不勞所得であります。富源から來る不勞所得が社會關係に轉換して來ますと廣い意味の地代になつて來るのであります。アメリカの國民經濟としてはさういふ剩餘を日本からチャンと取つて居る。日本は棉を買ひました分にはそれらの剩餘をアメリカに拂つて居る。そして棉を買ひまして是を綿布に仕上げて南洋、支那等に賣るとすれば此の過程に於て出た處の剩餘、是は労働剩餘だけであり、其處でアメリカの輸出品は不勞所得が多分に入つて居りますが日本の輸出品は労働所得だけしかありません。言ひ換えれば手間賃だけを貰つて居るだけである。指物師が此方から木の原料を買つて來て机を作つて賣る、其の間の手間賃を儲けると同様であります。それで富源生産力の豊が國民が不勞所得を漸次に蓄積してゆくといふことが、國民の富を特別に大な

らしむるのであります、是はアメリカに限らない、英吉利も今見る處では何時も輸入超過であり外國から資本の利子を取り、それで輸入を増して居るやうな所謂、金利生活をやつて居りますが、少し以前は盛んに輸出超過をやつたものであります。其の輸出品は英吉利としては工業品でありましてアメリカと違つて農産物ではない、工業品でありました。此の場合英吉利の工業は自國の富有なる鐵と石炭のおかげであります。今一つは殖民地から取れました原料のおかげであります。石炭も鐵も一文も代價を拂つたものではない自國で掘り出しては新しい機械を作り其の機械で毛織物を作る。或は綿織物を作りそして是を外國に賣る。輸出超過をして段々と資本を蓄積した。それで今度は外國に貸すやうになつて來るから、貸すやうになつた時はそれだけの富は生産からは出ません。今度は金利生活者として利子を取つて資本を殖やすのであります。これも不勞所得であります。斯くの如く富源生産力が豊なる場合には多くの不勞所得が出て來るから、従つて國の富はどん／＼増してゆきます。輸出超過の國になる程産業は進み得るのであります。處が日本には其の大事な生産力が特に貧弱であります、それから又資本が入つたといたしましても、富源を開發する産業なり、或は自國で生産した原料を用ひる工業であるとか兎も角富源にずつと連絡して居る産業であるならば、外國資本を借りて來て事業を起しても利益を得るのであります。即ち富源剩餘、不勞所得といふものが生産剩餘の中に入つて來ます。だからして其の剩餘の一部分を外國の資本家に利子として分配しても尙其の産業の剩餘は相當な利廻りになるのであります。アメリカが英吉利から資本を澤山に入れて事業を起しても其處から出る生産剩餘は、英吉利の資本家に一部分を分配しても尙アメリカ

の資本家は儲けるのであります。又労働者に對しても相當の優遇をしても尙儲かるのであります。それだけ剩餘は多いのであります。所が棉を買入れて綿布に仕上げて賣るのは其處に労働剩餘しか出ない。若しアメリカ等の並に利潤を相當取らうとするならば労働者に對して無理をすることに依つて資本家の利潤が出て來るのであります。是は實際に於ても其の通りであります日本の輸出品の内一番大きいものは生絲と綿製品であります。此の二大産業に於ての労働者はどうかといふと、殆んど大部分は女子であります。女子の労働者に對しては男子よりも遙かに不利な條件を以て仕事をさせ得るのであります。其處で是迄日本の貿易に於て綿絲市場と生絲といふものが日本の貿易を支えて呉れたのであります。此の重要な仕事は殆んど女子がやつて居るのであります。女子は唯黙つて仕事をし乍ら我々の國民經濟を今日迄支えて呉れたのである。其の間一體男子は何をして居たかといふ疑問が出るのであります。此の女子にさすれば悪い労働條件でも仕事が出来ます。三年働いて嫁入り支度さえ得られたらといふやうな氣持で田舎から工場に出てゆくといふのが大多數であります。斯ういふことは西洋に於ては見られないやうな特殊の労働條件の下に働らいたといふことで初めて資本家も相當の利潤が出て來る。或は相當以上にも出て來る。利潤が出て來るから其の事業が榮えたのであります。其の事業が榮えるといふことが日本の輸出貿易を支えて居つたといふことが出来るのであります。それで富源生産力を直接なり間接になり採用し得る産業は外國資本を借つて來ても引合ふことになりません。それが原料を外國から買つて製品して居るやうな工場では、外國資本を借つたのでは利潤が上らない譯です。それだけの仕甲斐がないのです。是が如何に

信用の厚い日本人であつても外國から資本が入らない譯であります。向ふが貸した處が利益がありそうに見えないし、又日本の側からも資本の利子が拂えないのでは大して利益にならないといふことの算盤を弾くのでありませうが、理論的には生産力の方面から説明出来ると思ふのであります。然しそれでも日露戦争に至る頃迄は、矢張り産業は發展したといふ其の譯は、富源が貧弱とはいひ乍ら、徳川期には殆んど開發されないものが澤山残つて居りました。鑛山にせよ、新しい鑛山も古い鑛山も新式の採掘精鍊技術に依つてやりました。土地も東北の土地北海道の土地を開き、全國に亘りて耕地整理をやるといふ風に富源生産力を増し、明治時代に入つて面目を一新した程多くなつて來た譯であります。又物自體は殖えないけれ共、利用の方法に於て多くなつて來たものもありません。暫くの間は是で持つてゆきます。

それから今一つ日本の特色は生絲であります。大體輸出貿易の半分を占めて居る生絲は、生産費といふものが非常に低くかつた。初めは繭を作つても農家の閑散の勞力を利用する。桑も山とか畑にあるものを用ゐるといふやうに繭の生産費は幾らもかゝつて居らない程少なかつた。其處で農家も繭は賣れたとだけ儲けたといふやうに考へて居つたのであります。又生絲の生産の方は綿絲等と違つて此の方は大部分は手工業の小規模なものであります。綿絲紡績は近代的なファクトリーであるが、生絲はマヌファクチュアアであつて、そして固定資本が少くない。流動資本としては安い女工の勞銀が大部分を占めて居りました。其處で繭といひ絲といひ餘程安い生産費になつて居る、故に生産費がどれだけか判然調べがつかないといふ有様である。そして此の生絲は何處に賣るかといふとア



アメリカに送る。アメリカでは生絲といふものは作らないから、其處で生絲の價格は何で決めるかといふと、アメリカに於ける購買力の如何によつて生絲の價格が決つて來るのであります。日本では生産費は安いがそれは價格を決するのではない。生産費が價格を決めるといふが、生絲の價格、世界商品としての生絲の價格は生産費には依らないのである。そしてアメリカでは、自分自身の國では生絲が出来ないから生絲の生産費といふものはアメリカでは問題にならない、日本で生絲の生産費が、幾らかゝるかといふことはアメリカでは無關係である。自分の國で生産費が幾らかと考へる時初めて生産費が貿易價格を決めるが、アメリカでは生絲が出来ないから少しも向ふでは生産費を問題にはしない。そしてアメリカでは生絲を幾らに買ふかといふことは、人口の需要が殖えるに従つて生絲を高く日本から買ひます。そのアメリカは萬年の繁榮國といはれるやうに昭和四年の秋に至る迄はアメリカは殆んど間違ひなく繁榮國としてのコースを通つて來た。故に生絲の需要は殖えます。それだけ生絲の値段は高くなつたのであります。それで日本の生産費は全然問題にならないで、生産費よりも遙かに高い處で此の生絲の價格が決まる。此の價格の狀勢なり或は貿易の起つて來る事情なりは、所謂比較的生産費説では全然説明出來ないのであります。それで生絲も値段の高い時は一梱三千二百七十圓といふ非常な高い處迄來ました。生産費よりもうんと高い處に賣れるといふことは、恰かも富源生産力が働くのと同じ作用をなして居るのである。更に其の輸出の總額といふものは全輸出貿易の半ばを占めるといふ大きいものであつて、是は日本にとりましては一大富源であつたといつてもよかつたのであります。

それから尙且貧弱な富源でもやつて来たのは、第三には技術でありまして、此の技術も徳川期に於ては全くなかつた處の新しい生産技術が明治に入つてどしどし外國から學びとられたのであります。歐米の技術は次第に進歩して来たのでありますが、日本の場合は明治以後に於て急激に何でもかでも皆持ち込んだ、だから一時に、技術といふ生産手段が忽然として現はれて来たのであります。歐米ではそんなことはない。技術が如何に生産の進歩に貢献するかは申す迄もありません。それから尙初めの間は資本主義をとつて、そして新しい經營の組織に依つて新しい事實を起して来た。そして新しい生産の組織なるものが、急激に生産の増進を引き起して来た。資本主義の生産は、資本が生産力を十分に働かして居る間は大きな効果を擧げるのであります。資本主義の行き詰りは生産力がよく動かないやうになつて来たときであります。日露戦争迄、資本主義が漸次成長してゆく期間に於ては、それが日本の産業に大きな役割を演じて居たのであります。尙是に附け加へて明治の初めから日露戦争迄は國家が先頭に立つて國民經濟の發展に就ては容易ならぬ努力をして居るのであります。出來得る限りの方法を加へ出來得る限りの助長手段を講じ、株式會社の如きも最初に政府がパンフレットを配つて民間に奨めて、斯ういふことをやつてみよといふので奨めたが民間では仲々やらない。政府のパンフレットには、外國では株式會社といふものがあつて、例へば株式に百圓拂つて置けば、損しても百圓で濟み、儲かる時は大きな資本を集めてやるからどれだけ儲かるか知れない程儲かる。是程都合のいい經營組織はないから一つやつたらどうか、と奨めるが仲々やらない。其處で政府自ら爲替會社や通商會社といふものを作つて模範を示したがまだやらな

い。今度は國立銀行を百何十といふ、銀行を設けて是を株式會社の組織として模範を示したので段々と解つて來た。それから株式會社が起つて來たやうなもので、日本の資本主義の發達は大體に於て、政府が先頭に立つてやつて來た。外國の資本主義の如く、ブルジョアが自己の努力を以て、經濟的並に政治的の勢力を獲得したのとは趣きを異にして居る。日本の資本主義は國家が助成した資本主義である。其處で資本主義と國家の方針とがピタリと一致して居る。所謂官民一致のものであつた。そして尙有力なある生産力を用ひて努力して來たのでありますから、日露戰爭迄は産業が發達して來た。然し此の頃から漸次に、生産力は己に物質的方面に於て缺乏を現はして來た。生絲の方は是は儲かるといふので、人々が閑散の勞働でなくて人手を借りてまでもやり、又桑を買ひ入れる。桑を作るために費用をかける。信州などでは米の穫れる田地にまで桑を植える。斯うなつて來れば繭の生産費は算盤に高く出て來る。それから製絲工場も段々とファクトリーに變ります。機械的作業に變つて來た。固定資本もかゝつて來る。労働者の方も相當の賃銀を拂はねばならぬ。工場にあつても社會問題が起つて來た。遂には生産費が段々と高くなり、生産費が算盤に上つて來た。その上に最近は不幸にしてアメリカの方では段々と需要が前程はなくなつて來た。或は人絹といふ競争者も現はれる。そうすると、此の生絲といふものは、普通の工業になつて了つた。富源生産力に類する不勞所得を出すことがないやうになつて來た。是は一つの生絲でありますけれども、影響は大きい。輸出貿易の半分を占めてゐたといふのであるから其の影響は大きい譯であります。次に技術の方でありますも、一度にうんと持ちかけて學んだが一應技術が行き渡つて來れば後は少し宛進

歩するといふことになつて、何も特徴はなくなつて来る。又資本主義も日露戦争頃に於ては略々成熟して來た。そして資本は可成り増殖されて來た。資本は増殖して來たが生産力はそれほど増さない。特に物質生産力が増さない。其處で資が本生産力を動かすといふ方面に於ては、已に十分に生産力を働かし得ないやうになつた。又更に政府の保護奨励も初めの間は、政府が非常な勢ひを以て産業革命を指導し、國民經濟の建設に貢献したのであります。政治家は國土的、經世家的態度を以て國民經濟の建設に臨んだ。知識は外國から新しいものを取つて來る。だから明治の初年に於ては洋行から歸つたといふ人は、凡べて人が違つたものとして歓迎されたのであります。何も知らない處に、種々のことを知つて居る者が外國から歸つて來ますから、實に重寶がられたものであります。今日は西洋に行つても大してえらくはならない。向ふで一つ所に居つては日本に歸つて來ると變化せる國情が解らないので、却つて前より少し馬鹿になる。日本程世界の電報通信を澤山取る國は英吉利以外にはない。日本に居つて新聞を見て居ると世界の事情が詳細にわかる。新聞を比較して御覽になつてもわかります。多くの外國新聞は世界的な狀勢の電報が少ないが、日本の新聞、例へば朝日、毎日を御覽になつてもわかるが、あらゆる方面からこんな事件はと思ふほどのものまでも高い電報料で載せる、であるから初めの間は外國に學ぶといふことが非常な利益になつたのであります。其處で初めは政府も外國からの新知識で指導して居りましたけれども、段々外國から入るものは入つて了つて外國から來るものはないやうになる。これに反し民間の方では段々と自分で經營し實際に經驗した知識を積んで來たから、民間の實業家が官吏より偉くなつて來た。又國土的經世家

的な精神を持つて居る人も次第に世を去つて少なくなつて來た。後は學校を出ると直ちに富豪から娘を貰つて呉れと歓迎され、直ちに立派な地位に就き、樂々と出世して來たやうな人が政治の局に當つて來た。所謂苦勞を知らない人々に依つて政治が行はれて來る。一方に於ては資本主義の成熟若くは爛熟から資本家の利益擁護のために一國の經濟政策を左右する。そして政府の政策は國民一般の利益を圖るのでなくして、一部階級の利益をのみ圖るやうな政策が續々出て來る。そして最も大衆の利益を圖る政策は常に曖昧にされて居る。此の點に於て最近の政府は國民經濟の指導能力を持たない。寧ろ反對に相當悪い方面に導いてゆく方の政策はやつて居るが、よくなるやうな、よくなるやうな政策は殆んどない。政黨政治始まつて以來、眞面目な經濟政策といふものは殆んど我々は見ることが出來ない。是だけの種々なる事情がぶつかつて、以前は上り坂であつたが今度は下り坂になつて來た。

日本の國民經濟として今日我々が考へねばならぬ處の大事な點が二つあります。それは生産力が不具者になつたといふことであります。先刻申しましたやうに、日露戰爭頃迄は人的物的生産力が大體に於て揃うて居つた。然しその後はそうでない。人的生産力は人口の増加と實業教育の進歩とに依つて増進する。勞働力も技術も増進する。所が物的生産力はそういかない。資財は主として富源から引き出すものであるから、富源に關係して來る。其處で大事な物的生産力は富源であるが、それは人工的に作り出すことの出來ない生産手段である。其處で人的と物的の生産力の釣合ひが失はれて來たのであります。同じ釣合ひを失つた場合でも人的の方が足らないで

物的の方が餘るのは始末が悪い。露西亞、南米、支那などでは開發されない富源が澤山あります。シベリアには殆んど手を着けてゐない。マルキシスト達は地球上の六分の一の面積を占める露西亞が共產主義をやつてゐる、偉大なものだと誇らかにいひます。さように地球の六分の一を占める面積の中でシベリア沿海州は殆ど手をつけて居らない。本國ですら手のつかない處が澤山あります。そういう状態でありますから、ぼつ／＼富源を開けばよいので、富源は幾らあつても心配ない。唯心配なのは人の方が多く餘つてゐることである。富源の方はチャンと休んで居てそれでいゝのでありますが、日本のやうに人的生産力が餘るのは始末が悪い。人は餘つて仕事をしないでも飯を食はなければならぬ。現に今日我々がそうであります。日本の家族制度では自分の親族に於て、仕事のない人があると何とか助けてやらなければならぬ。人的生産力の方が餘つて居る場合には、單に失業や就職難があるだけでない。現に職業収入を持つて居る人々がそのない人々を養つてゆかねばならないから、職業を持つて居る人も決して樂ではない。職業のないものは職業のあるものが養つて居ります。其處で人的生産力が餘つて居る場合は非常に困るのである。困るのは分配の問題であります。又生産の方からいふても、二つの生産力が結合した處だけが働いてゐる。結合し得ない處の生産手段はあつても何にもならない。此の意味に於て日本の生産力は人口が餘るから消費量だけは殖えるけれども是に對應するだけの生産力といふものは餘り殖えない、殖えないのは人的物的生産力の釣合ひを失つたことに原因する。今一つは生産力の分は富源が増し得ないから結合生産力としては餘り増加し得ない。資本の方は段々雪達摩を轉がす如く増殖して來る。資本は遠慮な

く増加して来る。生産力を動かすやうに資本と生産力との釣合がとれて居ると、資本主義はよく運轉してゆきます。又資本が足りない時は外國から借つて来るから差支へない。一番無事なことは、資本と生産力との釣合ひがとれてゆくと平和に資本主義は働いてゆく。アメリカでは資本も増加すれど生産力も衰へないが、日本の場合は生産力は増さないが資本は遠慮なく殖えて来る。そうなると大きな資本が生産力の上に覆さつて来る。生産力は自然に太り得ないで然かも資本の壓力のために抑へ付けられて居ります。であるから此の行き詰りを打開するには二つの道しかない、一つは資本主義の壓迫を取り除け緩和すること、即ち資本主義生産を改造すること、一つは物的生産力を加へるといふことであります、此の兩者の釣合ひがとれたならば結合生産力は増大する、資本の壓力が重過ぎるからは是を軽くすればいゝのである。全く根本から資本主義制を廢する。廢しないといふ根本問題に入らないでも、資本の壓力を軽くする。更に物的生産力が付加へられると、是で非常時日本の經濟が圓滑に動き出すのである。幸にして我が國には天祐が来るのであります。昨年秋から軍部の非常な決心によつて行はれ滿洲事變は、滿洲の富源生産力を我々に利用せしめ得る機會を與へて呉れたのであります。此の生産力をよく利用したならば先づ心配はないのであります。同時に此の資源と相關連して資本主義の改造に關する一般の輿論が非常に強い勢で起りつゝある。どう改造するかは考えものであるが、兎も角資本主義生産を今のまゝにして置ては行き詰るだけで打開策を其處に求めねばならぬといふことは一般の人々の己に頭の中に深く感じて居る。其處で資本主義の改造と富源生産力を附け加へるといふこと、此の二つに依つて我々の國民經濟は先づ救はれるとい

ふ見込みだけはいいたのである。然しそれならば實際どうしたらいいか、此の二つの大いなる解決の方針だけは與へられて居ります。然るにかゝる大業を爲すには強い勢力が働かねばならない。其處で其の働きを進めるには我々は如何にしたらいいかといふ問題が必ず出て來るのであります。今日に於て私の考えでは國民經濟の難關打開の前途は大體見えて來た。問題は此の前途に進んでゆく處の強大なる力が其處になければ何にもならない。此の力を我々は如何に認識するか實踐的には如何に此の力を強めて働かさせるかといふことが、今日與へられた處の一番肝腎な問題になると思ひます。(未完)